

## 青年期における対人コミュニケーション(I)<sup>†</sup>

——自己開示、孤独感、および両者の関係に関する発達的研究——

広 沢 俊 宗

対人コミュニケーションとは、自己に関する情報(メッセージ)を相手に伝達すると同時に、相手の情報を入手することによって、相互の理解を深め、より緊密な人間関係を築いていく一連の行為の相互作用過程であるとみなすことができる。このような対人コミュニケーションを構成する要因としては、送り手・受け手の個体要因とコミュニケーションを行なう状況要因とに分けられる。そして、状況要因はさらに、場面や環境に関する要因と、相互作用を行なう個人間の関係性に関する要因とに分けられる。したがって、これら一連の過程は、個人と状況を含む場としての観点から、送り手と受け手の双方向的な力動性を検討することが不可欠であると考えられる。

大坊(1986)は、このようなコミュニケーションを必要とする理由を次の2つにまとめている。

第1の理由は、潜在的な対象者の中から当人の関心に見合う受け手を選び出し、注意をひき、相手との特定の関係を形成ないし保持するためである。すなわち、他の成員とは異なる心理状態を共有する二者間に閉じた回路を作ることである。送り手は、コミュニケーションによって、受け手に何らかの反応を引き起こすことを期待している。しかも、送り手は受け手にもなり、循環的なループが形成されるので、受け手への効果とともに、送り手自身を変化させる働きがあるといえよう。コミュニケーション行動は他者の行為が原因でもあり、結果でもある。

第2の理由は、対人関係の均衡を回復させるためである。他者との間で自他および外的な事象についての情報や態度の不一致、不確かさがあると、それを解消して安定した関係を作るという働

きがある。Newcomb(1965)は、「コミュニケーションは対人的な緊張を軽減し、均衡状態を目指すために価値があるので学習されてきた重要な反応である」との見解を述べている。換言すれば、対人コミュニケーションは、情報を均等化する過程である。この過程において、対人関係の円滑さをはかるために他者と共通の行動の基盤を持ち、他者の行動の予測可能性を高めようとするのである。

いずれにせよ、コミュニケーションの主たる目的は、対人関係の実現を図ることであるといえる。そして、そのためには相互理解、すなわち、情報の共有化が前提となってくる。このような視点から、コミュニケーションと自己開示との関係をみた場合、自己開示量とコミュニケーションの直接性とは概ね正の相関関係にあることが見い出されている(大坊, 1980; Jourard, & Rubin, 1969; Matarazzo, Weitman, Saslaw, & Matarazzo, 1963)。しかしながら、一方では、自己開示性とコミュニケーション量(状況)との間に相補的關係を示す結果も報告されている(Ellsworth, & Ross, 1975; Rubin, 1975; Skotko, & Langmeyer, 1977)。

これらの結果は、相互作用状況の質を考慮しなければならないことを示唆している。すなわち、相補的關係が見られる状況は、双方の親密さや役割が付与された事態であり、コミュニケーションが自発的に行なわれているのに対し、相補的關係が見られるのは、互いに未知の者同士で、コミュニケーションを操作した場合である。さらに、話者間で何が期待されているかも加味する必要がある。

<sup>†</sup> 本研究の一部は、日本心理学会第48回大会において発表された。なお、本論文の作成にあたり、田中國夫教授の御指導を賜わり、また、調査の実施に際し、池田俊子・本池恵子両氏(関西学院大学社会学部昭和58年度卒)の協力を得ました。ここに記して深く感謝致します。

ところで、Jourard (1959) によると、自己開示は、「個人が自己の諸側面や経験を他者に知らしむる過程である」と定義されており、自分にとって重要な他者に十分に自己開示できるということが健康なパーソナリティにとっての必須の条件であるとしている。この定義にしたがえば、自己開示は対人コミュニケーションの一過程であるとみなすことができる。そして、自己開示に関する一連の研究は、自分の感情や考えを他者に知らせる能力が、正常な社会的関係を発達させ、維持する基本的な技能であることを示している (Altman, & Taylor, 1973; Chaikin, & Derlega, 1976; Jourard, 1971)。したがって、自己開示の欠如は、しばしば、さまざまな形式の個人的不適応や対人的不適応と結びつけられてきた (Carpenter, & Freese, 1979; Cozby, 1973)。このような不適応によって生じる感情のひとつに孤独感が挙げられる。

一方、孤独感に関する研究もまた、自己開示が困難であるということと深く関わっていることを示唆してきた。Sermat, & Smyth (1973) は、孤独な感情を報告するように依頼された300人のステートメントを分析することによって、いかなる年齢のどのような背景にある人々も、孤独の感情を個人的で重要な事柄を他者に話す機会の欠如に帰因させるということを見い出している。Horowitz, & French (1979) も、自由回答形式の質問紙を用いることによって、類似した結果を報告し、Perlman, Gerson, & Spinner (1978) は、高齢者を対象として同様の結果を見い出している。

孤独感とは、Peplau, & Perlman (1979) によると、「個人の社会的関係のネットワークがその人の願望より小さいか不満足なものであるときに生起する」とみなされているが、その他多くの社会学者によってさまざまに定義されており、それらに共通する重要な点が次のようにまとめられている。すなわち、孤独感とは、人の社会的関係の不足から生じる主観的な経験であり、不快で苦悩を与えるものである (Peplau, & Perlman, 1982)。

また、孤独感の測定に関しては、Russell (1982) によると、次の2つのアプローチがとられてきた。ひとつは、一次的アプローチであり、孤独感とは本来、その経験された強度の中で変化する

単一の一次的現象であるとみなすものである。Russell, Peplau, & Cutrona (1980) が開発した改訂版 UCLA 孤独感尺度はその代表的なものであり、その邦訳版が作成され、十分な信頼性および併存的妥当性が見い出されている (工藤・西川, 1982)。もうひとつは、多次元的アプローチであり、孤独感とは一次元尺度では捉えることのできない多次元的現象であるとみなすものである。Schmidt, & Sermat (1983) が開発した Differential Loneliness Scale (DLS) はこのアプローチをとり、4×5の2つの直交する次元、すなわち、関係性の次元 ((1)家族関係, (2)友人関係, (3)恋愛関係, (4)より大きな集団, あるいはコミュニティでの関係) と相互作用性の次元 ((a)関係の存在と欠如, (b)特定の関係についての接近と回避, (c)協力, (d)評価, (e)特定の関係に含まれるコミュニケーション) から構成されている。広沢・田中 (1984) は、Schmidt, & Sermat (1983) に準拠して異なった関係における孤独感尺度を作成し、4つの関係性の次元が下位尺度を構成していることを見い出している。また、尺度の信頼性は十分に認められており、改訂版 UCLA 孤独感尺度と自己報告による孤独感の質問紙とを用いて、併存的妥当性も一応裏付けられている。

Cecilia, Phillip, & Elizabeth (1982) は、大学生を対象に、Jourard Self-Disclosure Questionnaire (JSDQ; Jourard, 1971) と改訂版 UCLA 孤独感尺度とを用いて、対象別開示量と孤独感との関係を検討した結果、男女とも異性の友人への開示量と孤独感との間に有意な負の相関がみられ、さらに、女子の場合、同性の友人への開示量と孤独感との間にも有意な負の相関がみられたものの、男女とも、父・母への開示量と孤独感との間には有意な相関が見い出されなかったと報告している。このような結果から、大学生は、友人への開示量、とりわけ異性の友人への開示量が高ければ高いほど、孤独を感じていないことが示されたわけであるが、ここでは孤独感を一次的に捉えながら、自己開示は対象別、すなわち、多次元的に捉えているという点に問題が残されているように思われる。

そこで、本研究は、孤独感を2つの異なるアプローチ、すなわち、一次元尺度である改訂版

UCLA 孤独感尺度 (Russell, Peplau, & Cutrona, 1980) の邦訳版 (工藤・西川, 1982) と多次元尺度である異なった関係における孤独感尺度 (広沢・田中, 1984) の両方で捉え、困った場面における自己開示との関係を対象別開示量をもとに検討することを第1の目的とするものである。さらに、青年期にある中学・高校・大学生を対象とすることにより、自己開示、孤独感、および両者の関係を発達的に検討することを第2の目的とするものである。

## 方 法

### (1) 予備調査

自己開示を測定する代表的な質問紙としては、Jourard Self-Disclosure Questionnaire (JSDQ; Jourard, 1971) が挙げられ、その内容は6領域〔態度・意見、趣味・興味、仕事(勉強)、金銭、性格、身体〕から成り、各領域10項目、計60項目で構成されている。わが国では、加藤隆勝(1977)が8領域からなる質問紙を独自に開発しているが、世間話程度の浅い内容のものまで含まれているのに対し、久世・蔭山(1973)は困った場面に限定し、比較的深い内容のものに統一している。そこで、本研究では、孤独感との関係を検討するため、深さの程度が統一された困った場面における自己開示質問紙を用いることにする。

まず、久世・蔭山(1973)、および加藤隆勝(1977)の質問紙を参考にし、家庭生活、身体・健康、性格、友人関係、異性関係、学校生活、進学・就職、態度・意見の8領域を設定した上で、それぞれについて、「あなたが今までに、悩んだり苦しんだりして困ったことについて、なるべく具体的に、できるだけたくさん書いて下さい。」という質問を、中学生20名(男子10名、女子10名)、および大学生88名(男子46名、女子42名)を対象に、自由応答形式を用いて集団で実施した。そして、類似した反応をまとめたのちに、より網羅的に困った場面を抽出するため、久世・蔭山(1973)の質問項目を参考にし、最終的に、各領域ごとに3項目、計24項目を決定した。具体的な項目の内容は、Table 1 に示されている通りである。

### (2) 質問紙および尺度

#### 1. 困った場面における自己開示質問紙

予備調査で抽出された8領域各3項目、計24項目から成る困った場面について、父、母、最も親しい同性の友人、最も親しい異性の友人の4つの開示対象に対し、それぞれどの程度打ち明けるかを記入してもらった。反応カテゴリーの形式は、「すべてを打ち明ける」「どんなことで困っているかということだけを打ち明ける」「全然打ち明けない」の3件法で、開示量が高いほど高得点になるように0点から2点に得点化されている。なお、開示内容を偽って、あるいは実際とは反対のことを話した場合には、×印をつけてもらい、開示量としては0点と得点化した。したがって、各被験者の対象別開示量は、最高48点から最低0点の範囲内にある。

#### 2. 改訂版 UCLA 孤独感尺度

Russell, Peplau, & Ferguson (1978) が既に標準化していた尺度を、Russell, Peplau, & Cutrona (1980) が再検討して構成し直したものである。この20項目から成る改訂版尺度は、原尺度でみられた反応バイアスを避けるために、表現内容がポジティブとネガティブの各10項目をこみにして無作為に配列されている。反応カテゴリーの形式は、「しばしば感じる」「時々感じる」「めったに感じない」「決して感じない」の4件法で、孤独感が高いほど高得点になるように1点から4点に得点化されており、各被験者の得点は、最高80点から最低20点の範囲内にある。なお、本研究では、信頼性、妥当性が十分に認められている工藤・西川(1983)による邦訳版を使用した。

#### 3. 異なった関係における孤独感尺度

Schmidt, & Sermat (1983) が、多次元的アプローチにより開発した Differential Loneliness Scale (DLS) の概念モデルに基づき、広沢・田中(1984)が構成し直したもので、4×5の2つの直交する次元、すなわち、関係性の次元 ((1) 家族関係, (2) 友人関係, (3) 恋愛関係, (4) より大きな集団, あるいはコミュニティでの関係) と相互作用性の次元 ((a) 関係の存在と欠如, (b) 特定の関係についての接近と回避, (c) 協力, (d) 評価, (e) 特定の関係に含まれるコミュニケーション) から成っている。本研究では、青年期にある中学・高校・大学

Table 1 困った場面における自己開示項目の4対象に対する総開示量の平均値, 標準偏差, および因子負荷量 (回転前)

領域	開示内容	平均値	標準偏差	因子負荷量
家庭生活	1. 家庭内にもめごとや不和があるとき	2.15	1.89	.675
	2. 両親が自分の気持ちをわかってくれないとき	2.14	1.89	.705
	3. 両親がえこひいきをするとき	1.76	1.85	.644
身体・健康	4. 顔や容姿について悩んでいるとき	1.47	1.61	.630
	5. 健康に関する悩みがあるとき	2.70	2.07	.725
	6. 自分のスポーツ能力について悩んでいるとき	2.17	1.89	.702
性格	7. 自分の性格について悩んでいるとき	2.15	1.82	.788
	8. どうしようもない寂しさを感じたとき	2.06	1.80	.787
	9. 心から話し合える友人がいないとき	1.61	1.76	.799
友人関係	10. 自分が友だちに誤解されているとき	2.38	1.66	.801
	11. けんかや口論で友だちと気まづくなったとき	2.16	1.63	.803
	12. 自分が思っているほど友だちが自分を思っていないとき	1.57	1.68	.770
異性関係	13. 誰かに片思いをして悩んでいるとき	1.70	1.38	.677
	14. 異性との交際について不安があるとき	1.66	1.47	.755
	15. いやな異性から交際を申し込まれたとき	1.90	1.55	.655
学校生活	16. 先生に対して不満があるとき	3.20	2.17	.698
	17. 学校の成績やテストの点について悩んでいるとき	2.49	1.93	.777
	18. 学校生活の中で不満があるとき	2.71	2.11	.784
進学・就職	19. 進学しようか就職しようか迷ったとき	3.59	2.34	.740
	20. どの学校に進学すべきか迷ったとき	3.59	2.26	.706
	21. 自分の将来について不安を感じたとき	2.93	2.25	.780
態度・意見	22. 世間に対して不満を感じたとき	2.26	2.22	.760
	23. 自分の人生そのものに疑問を感じたとき	2.10	2.18	.768
	24. 現在の政治について, 不満を感じたとき	1.81	2.14	.671

Note. 4対象に対する総開示量は, 最高8点から最低0点の範囲内にある。

生を対象としていることから, 関係性の次元のより大きな集団, あるいはコミュニティでの関係は, クラブ内での関係に特定された。この尺度は, 各カテゴリーに2項目ずつ計40項目から構成されており, 反応バイアスを避けるために表現内容がポジティブとネガティブの各20項目をこみにして無作為に配列されている。反応カテゴリーの形式は, 「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で, 孤独感が高いほど高得点になるように1点から4点に得点化されており, 各被験者の得点は, 関係性の次元ごとに最高40点から最低10点の範囲内にある。

(3) 調査対象

対象者は, 鳥取県内の公立中学の生徒, 男子101, 女子119の計220名で, 学年別内訳は, 中1から中3の順に, 男子34, 34, 33, 女子36, 45,

38, 同県内の私立高校の生徒, 男子62, 女子153の計215名で, 学年別内訳は, 高1から高3の順に, 男子21, 20, 21, 女子40, 68, 45, および関西学院大学の学生, 男子71, 女子33の計104名で, 総計539名であった。

(4) 調査の実施

調査は, 1983年11月に質問紙によって集団で実施された。

結 果

(1) 困った場面における自己開示質問紙の因子分析

まず, 開示内容が等質であるかどうかをチェックするため, 困った場面における自己開示質問紙24項目の相関マトリックスから, 主因子法による因子分析が行なわれた。そして, Screenshot によ

り最終的に1因子のみが抽出され、その分散寄与率は55.6%で、「困った場面」因子と命名された。Table 1は、各項目の4対象に対する総開示量の平均値、標準偏差、および回転前の因子負荷量をあらわしているが、すべての項目において.63以上の高い負荷量が得られている。この質問紙の開示内容は、家庭生活、身体・健康、性格、友人関係、異性関係、学校生活、進学・就職、態度・意見の8領域にわたっているが、それぞれが悩んだり苦しんだりして「困った場面」をあらわしていることから、その意味での一次元性が認められ、開示内容の深さがほぼ等しいことが裏付けられた。したがって、開示量に関する分析については、24項目の合計得点による総開示量を用いることとする。

(2) 困った場面における自己開示質問紙の信頼性

困った場面における自己開示質問紙の信頼性を検討するため、ガットマンの折半法による信頼性係数が算出された。開示対象別には、父への開示で.95、母への開示で.95、最も親しい同性の友人への開示で.96、最も親しい異性の友人への開示で.97、そして、総開示量において.87より、いずれの場合においても十分な信頼性が保たれているといえる。

(3) 困った場面における自己開示量の性差、および学校段階差

困った場面における自己開示質問紙24項目の4つの開示対象に対する総開示量を従属変数とし、性×学校段階の2要因の分散分析を行なった結果、性の主効果 (F (1,533)=50.02, p < .001)、および学校段階の主効果 (F (2,533)=67.01, p < .001)は有意であったが、性×学校段階の交互作用 (F (2,533)=.12, n.s.)には有意差がみられなかった。Table 2は、ダンカンの多重比較を行なった結果であるが、すべての学校段階において性差が見い出されており、男子よりも女子の方が開示量の高いことが示されている。また、学校段階に関しては、男女とも中学よりも高校および大学の方が開示量が高いことから、中学時代から高校時代にかけて、開示量が増加し、その後、あまり変化しないことが示されている。

(4) 孤独感の性差、および学校段階差

改訂版 UCLA 孤独感尺度20項目の総得点を従属変数とし、性×学校段階の2要因の分散分析を行なった結果、性の主効果 (F (1,533)=11.36, p < .01)、および学校段階の主効果 (F (2,533)=3.37, p < .05)は有意であったが、性×学校段階の交互作用 (F(2,533)=2.50, n.s.)には有意差がみられなかった。Table 3は、ダンカンの多重比

Table 2 総開示量の男女別、学校段階別平均値、および標準偏差

	中学		高校		大学		学校段階差		
	M	SD	M	SD	M	SD	中一高	高一六	中一六
男子	25.78(25.55)		54.31(30.79)		59.16(30.89)		***		***
女子	45.04(29.75)		73.44(29.11)		75.18(32.98)		***		***
性差	***		***		*				

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

Table 3 改訂版 UCLA 孤独感尺度の男女別、学校段階別平均値、および標準偏差

	中学		高校		大学		学校段階差		
	M	SD	M	SD	M	SD	中一高	高一六	中一六
男子	37.51(10.91)		37.71(10.35)		35.47 (8.78)				
女子	35.81 (8.80)		32.39 (8.64)		34.67 (8.06)		**		
性差			**						

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

較を行なった結果であるが、高校においてのみ性差が見い出され、女子よりも男子の方が孤独感の高いことが示されている。また、学校段階に関しては、女子の場合にのみ高校よりも中学の方が孤独感の高いことが示されているが、孤独感に関しては、性差および学校段階差のいずれにおいても一貫した傾向が見い出されなかった。

(5) 異なった関係における孤独感の性差、および学校段階差

Table 4 は、異なった関係における孤独感尺度の男女別、学校段階別平均値、および標準偏差を示したものである。家族関係、および恋愛関係における孤独感に関しては、女子よりも男子の方が高い傾向にあるが、他の関係における孤独感についてはほとんど差がみられない。また、学校段階差に関しても一貫した傾向は見い出されていない。

Table 4 異なった関係における孤独感尺度の男女別、学校段階別平均値、および標準偏差

	関係性	中学		高校		大学	
		M	SD	M	SD	M	SD
男子	家族関係	19.57	(5.95)	20.52	(5.56)	20.20	(5.91)
	友人関係	18.92	(5.43)	20.03	(5.47)	18.90	(4.94)
	恋愛関係	30.76	(6.69)	25.81	(7.76)	27.11	(8.18)
	クラブ	18.64	(5.45)	21.48	(7.73)	21.61	(5.48)
女子	家族関係	18.59	(6.68)	17.88	(6.28)	17.18	(5.31)
	友人関係	18.25	(5.52)	16.96	(5.14)	19.03	(5.21)
	恋愛関係	26.96	(8.86)	22.19	(7.34)	26.36	(9.07)
	クラブ	19.09	(5.65)	20.66	(7.67)	20.09	(6.46)

(6) 対象別開示量の性差、および学校段階差

Table 5 は、対象別開示量の男女別、学校段階別平均値、および標準偏差を示したものである。各グループにおける対象別開示量の関係は、中学男女、高校男子の場合は、最も親しい同性の友人 > 母 > 父 > 最も親しい異性の友人、高校・大学女子の場合は、最も親しい同性の友人 > 母 > 最も親しい異性の友人 > 父、大学男子の場合は、最も親しい同性の友人 > 最も親しい異性の友人 > 母 > 父の順となっており、最も親しい同性の友人への開示量は、すべてのグループにおいて一番高い。そ

Table 5 対象別開示量の男女別、学校段階別平均値、および標準偏差

	開示対象	中学		高校		大学	
		M	SD	M	SD	M	SD
男子	父	5.72	(7.88)	10.81	(8.62)	10.00	(7.68)
	母	7.34	(9.00)	12.19	(9.41)	10.49	(8.64)
	同性の友人	10.66	(10.53)	22.06	(11.06)	23.31	(11.18)
	異性の友人	2.06	(4.92)	9.24	(10.04)	15.38	(11.49)
女子	父	6.38	(9.00)	9.33	(9.24)	10.06	(8.98)
	母	13.24	(11.04)	20.22	(10.60)	21.52	(11.80)
	同性の友人	21.90	(11.33)	31.69	(10.70)	27.37	(10.09)
	異性の友人	3.53	(7.87)	12.20	(11.93)	16.24	(10.40)

して、最も親しい同性の友人・母・父への開示量は、中学から高校にかけて急激に増加するものの、その後はほとんど変化がないのに対し、最も親しい異性の友人への開示量は、中学から高校、大学へと一様に増加する傾向が示されている。

(7) 困った場面における自己開示性と孤独感との関係

Table 6 は、対象別開示量と改訂版 UCLA 孤独感尺度との相関を男女別、学校段階別に示したものである。父・母への開示量と孤独感との相関は、すべてのグループにおいて有意でないのに対し、最も親しい同性の友人への開示量と孤独感の間には、すべてのグループにおいて有意な低い負の相関が見い出されている。また、最も親しい異性の友人への開示量と孤独感の間には、高校男女と大学男子においてのみ、有意な低い負の相関が見い出されている。

(8) 困った場面における自己開示性と異なった関係における孤独感との関係

Table 7 は、対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相関（全体）を示したものである。父への開示量と最も高い負の相関を示しているのは、家族関係における孤独感であり ( $r = -.33$ )、母への開示量に関しても家族関係における孤独感 ( $r = -.37$ )、最も親しい同性の友人に関しては友人関係における孤独感 ( $r = -.30$ )、最も親しい異性の友人に関しては恋愛関係における孤独感 ( $r = -.42$ ) である。このことから、対象別開示量とその対象を含む関係における孤独感との間に

Table 6 対象別開示量と改訂版 UCLA 孤独感尺度との相関

開示対象	男 子			女 子		
	中 学	高 校	大 学	中 学	高 校	大 学
父	-.15	-.17	-.20	-.21	-.13	-.03
母	-.13	-.10	-.19	-.14	-.06	-.08
同性の友人	-.23*	-.44***	-.37**	-.32***	-.22**	-.31*
異性の友人	-.04	-.42***	-.39***	-.07	-.24**	-.07

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

Table 7 対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相関(全体)

開示対象	関 係 性			
	家族関係	友人関係	恋愛関係	ク ラ ブ
父	-.33**	-.12**	.04	-.09*
母	-.37***	-.15***	-.04	-.06
同性の友人	-.11**	-.30***	-.23***	-.06
異性の友人	-.07*	-.19***	-.42***	-.02

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

Table 8 対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相関(中学男子)

開示対象	関 係 性			
	家族関係	友人関係	恋愛関係	ク ラ ブ
父	-.22*	-.05	-.08	-.09
母	-.23*	-.07	-.06	-.08
同性の友人	-.08	-.26**	-.10	-.18*
異性の友人	-.23**	-.04	-.15	-.09

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

は、有意な相対的に高い負の相関が見い出されており、自己開示と孤独感との関係が孤独感を多次元的に捉えることにより明確にされたといえる。

また、Table 8~13は、男女別、学校段階別に対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相関を示したものである。どのグループにおいても、父・母への開示量は家族関係における孤独感と最も高い負の相関を示しており (r=-.22~- .43, r=-.23~- .48), 性差, および学校段階差はみられない。最も親しい同性の友人への開示量は、ほとんどのグループにおいて友人関係における孤独感と最も高い負の相関を示しているが (r=-.26~- .46), 中学女子の場合は恋愛関係における孤独感 (r=-.48), 高校男子と大学女子の場合はクラブ内での孤独感 (r=-.37, -.40) との相関が高い。また、最も親しい異性の友人への開示量も、ほとんどのグループにおいて恋愛関係における孤独感と最も高い負の相関を示しているが (r=-.33~- .55), 中学男子の場合は家族関係における孤独感 (r=-.23), 大学男子の場合は友人関係における孤独感 (r=-.35) との相関が高い。ただし、これらに関しては、性差, およ

Table 9 対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相関(中学女子)

開示対象	関 係 性			
	家族関係	友人関係	恋愛関係	ク ラ ブ
父	-.36***	-.15	-.28	-.22*
母	-.40***	-.07	-.28	-.02
同性の友人	-.03	-.18*	-.48**	-.15
異性の友人	.12	.03	-.48**	.11

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

Table 10 対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相関(高校男子)

開示対象	関 係 性			
	家族関係	友人関係	恋愛関係	ク ラ ブ
父	-.37**	-.17	.25	-.29*
母	-.26*	-.05	.26	-.26*
同性の友人	-.15	-.30**	-.11	-.37**
異性の友人	-.07	-.31**	-.33*	-.32*

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

Table 11 対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相感(高校女子)

開示対象	関係性			
	家族関係	友人関係	恋愛関係	クラブ
父	-.35***	-.15*	.22*	-.01
母	-.36***	-.19*	.24	-.09
同性の友人	.04	-.30***	.03	.02
異性の友人	-.04	-.29***	-.36**	-.15

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

Table 12 対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相関(大学男子)

開示対象	関係性			
	家族関係	友人関係	恋愛関係	クラブ
父	-.43***	-.10	.04	-.15
母	-.33**	-.08	.13	-.12
同性の友人	-.23*	-.46***	-.02	-.18
異性の友人	-.31**	-.35**	-.29**	-.16

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

Table 13 対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相感(大学女子)

開示対象	関係性			
	家族関係	友人関係	恋愛関係	クラブ
父	-.40*	-.13	.01	-.02
母	-.48**	-.16	.02	-.12
同性の友人	-.29*	-.38*	-.05	-.40*
異性の友人	.03	-.15	-.55***	-.25

Note. \*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

女性の方が自己開示が高いとする報告もあれば(榎本, 1987; Jourard, & Lasakow, 1958; 加藤隆勝, 1977; 久世・蔭山, 1973; Pedersen, & Breglio, 1968; Rivenbark, 1971), 性差はみられないとするものもある(Barnlund, 1975; Plog, 1965; Vondracek, & Marshall, 1971)。このような不一致に関しては, 開示者の性役割パーソナリティや性役割期待といった個人差要因も含め, 開示対象との関係や開示内容などの具体的な対人場面に働く諸要因を考慮に入れて, さらに検討していく必要があると思われる。

自己開示の学校段階差に関しても, 男女とも一貫した傾向が見い出され, 中学から高校にかけては開示量が有意に増加しているものの, 高校から大学にかけてはほとんど変化がなかった。自己開示の発達の変化については, Jourard (1961) は, 自己の成長に伴って開示量が増加し, 老年期に至って減少するとしている。また, Rivenbark (1971) は, 小学4年から高校3年までの児童生徒を対象に調査した結果, 友人への自己開示が中1から高1にかけて急激に高まることを報告している。しかしながら, 青年期における自己開示にはほとんど差がみられないという研究結果もあり(加藤隆勝, 1977), 開示対象や開示内容の深さも考慮した上で詳細に検討していく必要があろう。

孤独感の性差, および学校段階差に関しては, 主効果は有意であったが, 多重比較の結果, 一貫した傾向は見い出されなかった。従来の諸研究においても, 性差については必ずしも一貫した結果が見い出されておらず, 女性の方が男性よりも孤独感が高い(Donson, & Georges, 1967; Weiss, 1973)という知見と, やもめ暮らしの男性では同じような状態の女性に比べて孤独感が高い(Shaver, & Rubinstein, 1979)という異なる結果が報告されている。また, 工藤・西川(1983)は, 高校生から一般社会人までを対象に調査した結果, 大学新生生においてのみ女子よりも男子の方が孤独感が高かったとしているのに対し, 諸井(1985, 1987)は, 高校生, および大学生において, いずれも男子の方が女子よりも孤独感が高かったと報告している。Loucks (1980) は, 孤独感と連合する情緒ならびに自己概念を検討する中で, 女性は男性より感情的であるという仮定の一

び学校段階差に一貫した傾向は見い出されなかった。

## 考 察

自己開示の性差に関しては, 中学・高校・大学のすべての学校段階において一貫した傾向が見い出され, 男子よりも女子の方が開示量が高かった。従来の諸研究でも, 量的な差はあるが質的な違いはないとするものが多いが, 必ずしも一貫した結果が得られているわけではない。男性よりも



般化に疑問を投げかけているが、孤独感は物理的および心理的条件と深く関連するものであることから、性差に関する一般的結論を下すことは困難なように思われる。

孤独感に関する発達的变化に関しては、まだまだ十分な研究結果が報告されていないのが現状であるが、落合(1982)は、孤独感の規定因を発達的に捉え、人生の各時期に感じられる孤独感は、人との関係に関する次元(対他次元)、自己のあり方の意識に関する次元(対自次元)、時間的展望に関する次元(時間的展望の次元)の3次元構造内に位置づけられるとしている。そして、児童期(正確には中学生まで)の孤独感は、対他次元から成る1次元構造、青年期から成人前期までの孤独感は、対他次元と対自次元から成る2次元構造、成人後期および老年期(すなわち45歳以上)の孤独感は、対他次元、対自次元、時間的展望の次元から成る3次元構造であることを示している。このような物理的および心理的条件と深く関連する孤独感の規定因などの質的差異は、自己の成長と環境の変化に伴い、発達的に変化すると考えられるが、量的変化に関する一般的結論を下すことは、現状ではかなり困難なように思われる。

異なった関係における孤独感に関する性差、および学校段階差に関しても、一貫した傾向は見い出されなかった。DLSは、過去の研究に基づいて(Sermat, 1980)、孤独な経験の一因になると思われるある種の社会的関係の欠乏感、すなわち社会的関係への不満感を測定するものであり、そのような関係の質的側面を探ろうとするものである。ここでは、家族関係、友人関係、恋愛関係、クラブ内での関係の4つの関係性が取り上げられたわけであるが、これらの関係の重要性に関する発達的变化は、後述する対象別開示量に反映されていると思われるものの、異なった関係における孤独感に関しても、性差、および学校段階差について一般的結論を下すことは、現状では困難なように思われる。

対象別開示量の性差、および学校段階差に関しては、中学男女、高校男子の場合は、最も親しい同性の友人>母>父>最も親しい異性の友人、高校・大学女子の場合は、最も親しい同性の友人>

母>最も親しい異性の友人>父、大学男子の場合は、最も親しい同性の友人>最も親しい異性の友人>母>父の順となっており、最も親しい同性の友人への開示量は、すべての性、学校段階において最も高く、大学生を対象に調査した榎本(1987)と同様の結果を示している。そもそも青年期は、生まれてから児童期まで持続されてきた両親への依存的関係から離脱し、多様な仲間との人間関係をとり結びつつ、自主・独立の道に向けて歩み始める時期であるといわれている。そして、児童期から青年期に移行する過程で、準拠対象が親から友人に推移していくことが、安藤(1966)、および古畑・向井(1975)によって見い出されている。このような友人関係の発達、あるいは友人関係の相対的重要度の増加に伴い、開示量も増大しているといえよう。

ところで、同性の友人に次ぐものとしては、母親であるとする研究結果もあれば(加藤義明, 1977; West, & Zingle, 1969)、異性の友人であるとするものもある(Barnlund, 1975)。また、女子では母親、男子では異性の友人というように男女で異なった傾向を報告しているものもある(榎本, 1977; Jourard, & Richman, 1963; Rivenbark, 1971)。本研究の場合、対象別開示量は、最も親しい異性の友人を除いて考えると、性差、および学校段階差を越えて、最も親しい同性の友人>母>父の順になっており、開示内容が日常生活における困った場面に限定され、しかも比較的深い内容に統一されているためであると思われる。なお、三者への開示量は、中学から高校にかけて急激に増加しているものの、その後はほとんど変化がみられない。

一方、最も親しい異性の友人への開示量は、中学から高校、高校から大学へとそれぞれ一様に増加している。また、異性への開示量の相対的順位は、中学男女、高校男子で4番目であったものが、高校・大学女子で3番目、さらに、大学男子で2番目となっており、このような変化は、異性関係の発達的变化と密接に関わりがあると考えられるが、今後さらに検討していく必要がある。

対象別開示量と改訂版 UCLA 孤独感尺度との相関を男女別、学校段階別に検討した結果、父・母への開示量と孤独感との相関は、すべてのグル

ープにおいて有意でなく、この点については、Cecilia, Phillip, & Elizabeth (1982)の結果を支持するものとなった。しかし、最も親しい同性の友人への開示量と孤独感との間には、すべてのグループにおいて有意な低い負の相関が見い出され、最も親しい異性の友人への開示量と孤独感との間には、高校男女と大学男子においてのみ、有意な低い負の相関がみられた。異性の友人への開示量と孤独感に関して、中学で男女とも相関がみられなかったのは、異性の友人への開示量が極端に少ないことから (Table 5 参照)、異性関係の未発達、すなわち異性関係の欠如によるものと考えられる。これに対し、大学女子の場合は、男子と同様、異性の友人に比較的开示していることから (Table 5 参照)、むしろ異性関係における大学男女間の質的差異ではないかと推測される。しかし、この点に関しては、さらに詳細に検討する必要があると思われる。

いずれにせよ、性差、およびすべての学校段階差を越えて、さまざまな悩みや困ったことを同性の友人により多く打ち明けている人ほど孤独感が低く、また、性別、学校段階によっては、異性の友人に打ち明けることと孤独感とが関連していることが示された。

Table 7 より、対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相関 (全体) をみると、父への開示量と最も高い負の相関を示しているのは、家族関係における孤独感であり ( $r = -.33$ )、母への開示量に関しても家族関係における孤独感 ( $r = -.37$ )、最も親しい同性の友人に関しては友人関係における孤独感 ( $r = -.30$ )、最も親しい異性の友人に関しては恋愛関係における孤独感 ( $r = -.42$ ) であり、このことから、対象別開示量とその対象を含む関係における孤独感との間に、有意な相対的に高い負の相関が見い出されている。これは、父や母にいろいろな悩みや困ったことを打ち明けることが多い人ほど、家族関係における孤独感が低く、同性の友人に打ち明けることが多い人ほど、友人関係における孤独感が低く、異性の友人に打ち明けることが多い人ほど、恋愛関係における孤独感が低いことを示している。このように、孤独感を多次的に捉えることにより、対象別開示量との関係がより明確にされ、開示対象

と孤独を感じる関係性とが対応して関連していることが明らかにされた。

なお、男女別、学校段階別に、対象別開示量と異なった関係における孤独感尺度との相関が算出されたが (Table 8~13参照)、すべてのグループで、父・母への開示量は家族関係における孤独感と最も高い負の相関を示し ( $r = -.22 \sim -.43$ ,  $r = -.23 \sim -.48$ )、性差、および学校段階差はみられなかった。最も親しい同性の友人への開示量は、ほとんどのグループで、友人関係における孤独感と最も高い負の相関を示しているが ( $r = -.26 \sim -.46$ )、中学女子の場合は恋愛関係における孤独感 ( $r = -.48$ )、高校男子と大学女子の場合はクラブ内での孤独感 ( $r = -.37$ ,  $-.40$ ) との相関が高い。また、最も親しい異性の友人への開示量も、ほとんどのグループで、恋愛関係における孤独感と最も高い負の相関を示しているが ( $r = -.33 \sim -.55$ )、中学男子の場合は家族関係における孤独感 ( $r = -.23$ )、大学男子の場合は友人関係における孤独感 ( $r = -.35$ ) との相関が高い。このような相違は、友人関係、恋愛関係の性差、および発達の変化と関連するものであると思われるが、ここでは、一貫した傾向は見い出されなかった。

広沢・田中 (1984) は、中高大生を対象に改訂版 UCLA 孤独感尺度と異なった関係における孤独感尺度とを施行し、両者の関係を明らかにしているが、それによると、改訂版 UCLA 孤独感尺度と異なった関係における孤独感尺度の4つの下位尺度間の相関は、友人関係で  $r = .73$ 、クラブ内での関係で  $r = .41$ 、家族関係で  $r = .37$ 、恋愛関係で  $r = .26$  という結果が報告されている。この数値に示されているように、改訂版 UCLA 孤独感尺度は友人関係における孤独感とかなり強い関連性があり、したがって、対象別開示量と改訂版 UCLA 孤独感尺度との相関においても、最も親しい同性の友人への開示量と最も関連性があったと考えられる。ただし、両者の関係が青年期特有のものであるかどうかは、今後、さまざまな年齢層を対象として検討する必要があるとしている。

いずれにせよ、開示量と孤独感との関係を検討する際には、本研究のように開示量を対象別に捉える場合、孤独感の方も多次的に捉える方が妥

当性があるといえる。そして、対象別開示量と異なった関係における孤独感との間には、それぞれの関係性において密接な関係（負の相関）が見い出された。

ところで、対人コミュニケーションとは、自己に関する情報（メッセージ）を相手に伝達すると同時に、相手の情報を入手することによって、相互の理解を深め、より緊密な人間関係を築いていく一連の行為の相互作用過程を意味するものであり、したがって、自己開示は、対人コミュニケーションの一過程にすぎないと考えられる。本研究のような質問紙による調査方法では、このような対人コミュニケーションの相互作用過程を捉えることには限界があり、そういう点では、今後は、一連の実験研究（大坊・杉山, 1974; 大坊・杉山・吉村, 1975; 大坊, 1977, 1978）を参考にしながら、両者をうまく融合していくことが要請されると考えられる。

また、発達の变化を問題にする場合、パネル調査が困難なため、ともすれば本研究のような横断的方法に走りがちであるが、真に発達の過程を捉えようとするならば、縦断的方法を積極的に取り入れていくことが必要であると思われる。併せて今後の課題としたい。

#### 引用文献

- Altman, I., & Taylor, D.A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. Atlanta: Holt, Rinehart & Winston.
- 安藤延男 1966 青年期における準拠集団の推移 心理学研究, 37, 219-229.
- Barnlund, D.C. 1975 *Public and private self in Japan and the United States*. Tokyo: Simul Press.
- Carpenter, J.C., & Freese, J.J. 1979 Three aspects of self-disclosure as they relate to quality of adjustment. *Journal of Personality Assessment*, 43, 78-85.
- Cecilia, H.S., Phillip, G.B., & Elizabeth, A.P. 1982 Loneliness and Patterns of Self-Disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 524-531.
- Chaikin, A.L., & Derlega, V.J. 1976 Self-disclosure. In J.W. Thibaut, J.T. Spence, & R.C. Carson (Eds.), *Contemporary topics in social psychology*. Morristown, N.J.: General Learning Press.
- Cozby, P.C. 1973 Self-disclosure: A literature review. *Psychological Bulletin*, 79, 73-91.
- 大坊郁夫 1977 2人間コミュニケーションにおける言語活動性の構造 実験社会心理学研究, 17, 1-13.
- 大坊郁夫 1978 3者間コミュニケーションにおける対人印象と言語活動性 実験社会心理学研究, 18, 21-34.
- 大坊郁夫 1980 二人会話行動における対人的親近性認知の効果 実験社会心理学研究, 20, 9-21.
- 大坊郁夫 1986 対人行動としてのコミュニケーション 対人行動学会編 対人行動の心理学 誠信書房
- 大坊郁夫・杉山善朗 1974 二者間コミュニケーションにおける単独発言におよぼす不安性の効果 実験社会心理学研究, 14, 1-14.
- 大坊郁夫・杉山善朗・吉村知子 1975 二者間コミュニケーションにおける不安性の効果—とくに、高・低両極の不安水準の機能について— 実験社会心理学研究, 15, 1-11.
- Donson, C., & Georges, A. 1967 *Lonely-land and bedsitter-land*. Bala, North Wales: Chapples.
- Ellsworth, P. C., & Ross, L. 1975 Intimacy in response to direct gaze. *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 592-613.
- 榎本博明 1987 青年期（大学生）における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91-97.
- 古畑和孝・向井敦子 1975 準拠集団と道徳性の発達（第1報）子どもの準拠人 国際基督教大学 I-A, 教育研究, 18, 55-93.
- 広沢俊宗・田中國夫 1984 異なった関係における孤独感尺度の構成 関西学院大学社会学部紀要, 49, 179-188.
- Horowitz, L.M., & French, R. 1979 Interpersonal problems of people who describe themselves as lonely. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 762-764.
- Jourard, S.M. 1959 Self-Disclosure and other-cathexis. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 428-431.
- Jourard, S.M. 1961 Age trends in self-disclosure. *Merrill Palmer Quarterly*, 7, 191-197.
- Jourard, S.M. 1971 *The transparent self*. New York: Van Nostrand. (岡堂哲雄訳 1974 透明なる自己 誠信書房)
- Jourard, S.M., & Lasakow, P. 1958 Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, 19-98.
- Jourard, S.M., & Richman, P. 1963 Disclosure output and input in college students. *Merrill Palmer Quarterly*, 9, 141-148.
- Jourard, S.M., & Rubin, J.E. 1969 Self-Disclosure and Touching: A study of Two Modes of Inter-

- personal Encounter and their Interrelation. *Journal of Humanistic Psychology*, 8, 39-48.
- 加藤義明 1977 自己表出性に関する研究 I 日本心理学会第41回大会発表論文集, 1218-1219.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ No. 14 日本心理学会
- 工藤力・西川正之 1983 孤独感に関する研究 (I) —孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討— 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- 久世敏雄・蔭山英順 1973 「困った場面」における自己開放性についての一研究 依田新 (編) わが国における青年心理学の発展 金子書房 151-170.
- Loucks, S. 1980 Loneliness, affect, and self-concept: Construct validity of the Bradley Loneliness Scale. *Journal of Personality assesment*, 44, 142-147.
- Matarazzo, J.D., Weitman, M., Saslaw, G., & Matarazzo, J.D. 1963 Interviewer influence on durations of interviewee speech. *J. verb. Learn. verb. Behav.*, 1, 451-458.
- 諸井克英 1985 高校生における孤独感と自己意識 心理学研究, 56, 237-240.
- 諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, 26, 151-161.
- Newcomb, T.M., Turner, R.H., & Converse, P.E. 1965 *Social Psychology: The study of human interaction*. Holt, Rinehart & Winston. (古畑和孝訳 1973 社会心理学—人間の相互作用の研究— 岩波書店)
- 落合良行 1982 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究, 30, 233-238.
- Pedersen, D.M., & Breglio, V.J. 1968 Personality correlates of actual self-disclosure. *Psychological Reports*, 22, 495-501.
- Peplau, L.A., & Perlman, D. 1979 Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In Cook, M., & Wilson, G. (Eds.), *Love and attraction*. Pergamon Press.
- Peplau, L.A., & Perlman, D. 1982 Perspective on loneliness. In Peplau, L.A., & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness: A sourcebook of current theory, research, and therapy*. John Wiley & Sons, Inc.
- Perlman, D., Gerson, A., & Spinner, B. 1978 Loneliness among senior citizens: A report. *Essence*, 6, 3-17.
- Plog, S.C. 1965 The disclosure of self in the United States and Germany. *Journal of Social Psychology*, 65, 193-203.
- Rivenbark, W.H., III 1971 Self-disclosure patterns among adolescents. *Psychological Reports*, 28, 35-42.
- Rubin, Rubin. Z. 1975 Disclosing oneself to a stranger: Reciprocity and its limits. *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 233-260.
- Russell, D. 1982 The measurement of loneliness. In Peplau, L.A., & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness: A sourcebook of current theory, research, and therapy*. John Wiley & Sons, Inc.
- Russell, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- Russell, D., Peplau, L.A., & Ferguson, M. 1978 Developing a measure of loneliness. *Journal of Personality Assessment*, 42, 290-293.
- Schmidt, N., & Sermat, V. 1983 Measuring Loneliness in Different Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 1038-1047.
- Sermat, V. 1980 Some situational and personality correlates of loneliness. In J.Hartog, J.R.Audy, & Y.A. Cohen (Eds.), *The anatomy of loneliness*. New York: International Universities Press.
- Sermat, V., & Smyth, M. 1973 Content analysis of verbal communication in the development of a relationships: Conditions influencing self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 26, 332-346.
- Shaver, P., & Rubinstein, C.M. 1979 Living alone, loneliness, and health. Paper presented at the 87th Annual Convention of the American Psychological Association, New York City.
- Skotoko, V.P., & Langmeyer, D. 1977 The effects of interaction distance and gender on self-disclosure. *Sociometry*, 40, 178-182.
- Vondracek, F.W., & Marshall, M.J. 1971 Self-disclosure and interpersonal trust: an exploratory study. *Psychological Reports*, 28, 235-240.
- Weiss, R. 1973 *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*. Cambridge, Mass.: M.I. T. Press.
- West, L.W., & Zingle, H.W. 1969 A self-disclosure inventory for adolescents. *Psychological Reports*, 24, 439-445.